

観察からの仮説 担任の端的に伝える配慮もあり、教示への関心は示していた。それでも、前に座っている子の服を触ってしまう。担任はその都度注意を促すが、同じことを繰り返す。他児も、徐々に集中して話が聞けなくなる。仮説として、話を聞かないといけないことは分かっているが、周囲からの刺激が全て入ってしまい、必要な刺激だけを適切に整理できていないのでは、と考えた。



助言・検討内容 席の配置を検討した。B児は列の中央に配置されていたので、不要な刺激が入りにくい最前列にする提案を行った。しかし、担任は「背の順に配置しているため、最前列では、他児への影響がある」という懸念を示したため、一番端に一人で座る方法を提案した。

その後 隣の子とお喋りする場面は時々あるが、集中力は格段に向上した。一斉場面で担任との距離が近くなったことで個別指示に近い環境になり、B児にとって刺激が整理された環境となった。また、この支援を通じて他児の集中力も上がり、クラス運営自体がスムーズになった、との感想が聞かれた。B児についての正しい理解が、クラス全体の支援にもつながることに気づかれた。



4 考察

1) “視覚支援” “環境の工夫” に対するイメージの変化

支援開始当初は、検討会の際に園の職員から「うちの園では個別に絵カードを見せて教える余裕はないので」といった発言がよく聞かれました。

その際は、身振りを交えながら話す、実物や見本を見せながら説明する、短く区切って話すことも有効な支援方法であることをお話させていただきました。“視覚支援＝カード”といった先入観があったのかもしれませんが、担任の身振りや普段教材として使用している身近な物が視覚的アプローチとして有効で

あると理解していただき、最近は意識的に取り入れてくださる担任も増えていきます。訪問支援を通して、発達が気になる児への“視覚支援”や“環境の工夫”が今までの集団運営の延長線上にあることに気づいていただいたケースは多いと感じます。

2) 障がい特性だけでなく“遊び”に目を向ける重要性

幼稚園は“教育”として活動が進められています。幼稚園における教育の原点は“遊び”です。しかし、児の気になる行動と障がい特性のみを問題として捉え、遊びの充実や困っている児の気持ち＝行動理由がクローズアップされていない場合もあります。支援は、児の好みや性格等、ありのままの姿を知ることから始まります。その上で、発達の状況や気になる行動、障がい特性を照らし合わせ、行動理由を考え、児が意欲的に集団生活を過ごすための方法を考える必要があります。訪問支援では、支援の手順を担任と十分に共有することも重要と考えています。

3) “園全体での支援体制”の温度差

“対象児が困っている理由を分析し、理由に即した対応を考えていく”という支援の基本が定着している園は増えていますが、担任一人で支援を頑張り、園全体に支援の必要性が共有されていない場合もあります。この事態に関しては、園内研修の周知、充実を図っていく必要を感じています。

5 まとめ

幼稚園では、担任一人でクラスを運営していることが多く、落ち着いて児を観察する余裕がない場合もあります。

担任の努力を労い、担任の適切な関わりを発見し、認めていくことも幼稚園支援の重要な役割です。担任が無意識に行っている大事な対応が意識化されることで、確実な支援となります。担任が自信をもって適切な支援にあたることは、対象児がより安心して集団生活を送ることに直結します。

今後も、園の方針やクラスの状態に配慮しながら可能な支援を共に模索し、幼稚園支援に携わりたいと思います。